グループワークと人間関係

社会福祉学部　社会福祉学科２年安岡　悠河
ＮＰＯ法人菜の花こどものいえ
ゼミ：山本和枝

①　自分の成長と気づきについて

サービスラーニング活動をしていくために、地域コース全体でNPOなどの話を聞いたとき、「地域」から体験的に学ぶということは、ただ話を聞いて終わるのではなく自分から動くという能動的な学習を大切にするべきだと学んだ。また、サービスラーニングは地域で生じている問題や必要とされていることなど、地域のことを事前に調べることが必要とされること、社会に貢献する活動を通して学問的、人格的、市民的な学びを深めていくことも大切だと学んだ。

活動先が決まってからは、主にグループワークを通して多くのことを学ぶことができた。まず、同じようなことに興味や関心があるというのに感じ方や考えが自分とは違うということに気づいた。自分がほとんど興味を持たず、何も感じなかったことに対して様々なことを考え、真剣に取り組もうとする人がいるとわかった。このことから、相手の意見や考えを理解できないからという理由で聞き入れないことや、拒絶をしてはいけないと学んだ。また、私は高校生の頃から実習などを通して様々な施設へ行ってきた。そのため、「知っているつもり」でいただけで何も理解していなかったということにも気づくことができた。

サービスラーニングでの私の成長や気づきというものは、活動先で学んだことよりも人と関わっていく中で学んだことから来るものが多い。今まで話し合いというものは結局、誰か一人の意見にみんなが乗っかり、それをまるでみんなで考えて出した意見であるかのように言うといったものだと思っていた。まじめに考えた人の意見に何も考えてない人が便乗するという無駄なことだと考えていた。それはグループワークも同じことで、自分一人で考えた方が良い結果になるし、質も高くなると思っていた。サービスラーニングの最終的なまとめをしている今でも、「みんなで一緒に」や「グループワーク」といったものは嫌いであり、自分一人で考えた方が質は高く、良い結果を生み出せると思っている。しかし、無駄なことだとは思わなくなった。活動について振り返り、自分が行かなかった活動先での活動内容や感じたこと、学んだことを報告しあうことがとても有意義な時間だと感じた。

以上のことから、私はサービスラーニングで３つのことに気づいた。１つ目は、同じ活動をしていても感じ方や考え方が違い、それを聞き入れないということや拒絶をしてはいけないということ。2つ目は、人の意見や考えを聞くことで、理解できていないのに「知っているつもり」になっていたこと。3つ目は、活動の振り返りや報告をしあうことにより、それが自分の知識になるということだ。これら３つのことに気づいたため、「地域」から体験的に学ぶということは、ただ話を聞いて終わるのではなく自分から動くという能動的な学習が大切ということ。サービスラーニングは地域で生じている問題や必要とされていることなど、地域のことを事前に調べることが必要とされること。社

会に貢献する活動を通して学問的、人格的、市民的な学びを深めていくことも大切だということ。というような NPO などから話を聞いた時に言っていたことの全てに、積極的に人と関わり、相手の話をよく聞き、そこから得たものを吸収するということが当てはまるという考えに至った。以前の私であれば同じ立場である学生の話を聞いても得るものなどないと考え、相手の話を聞かずに成長の機会を失っていたと思う。そのため、上記で述べた 3 つのことに気づいたことがサービスラーニングでの私の成長である。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

私がお世話になった活動先では、地域に住んでいる高齢者の方を呼んで行う火起こし体験や、消防署の方々に来ていただいて消火器の使い方を学ぶといったことや起震車体験をするといった防災訓練を行っていた。また、公民館や小学校などを利用しており、地域との関わりはしっかりしているように見えた。しかし、夏祭りの企画をしていて活動先だけで行うことを知り、もう少し地域との関わりを深めることができるのではないかと思った。私の地元では、学童保育所の夏祭りは子ども家庭支援センターなどと合同で行っており、小学校の体育館を会場としていた。学童に通っていない子どもも、保護者や保護者でない大人も、高齢者も関係なく誰でも来ていいというような大がかりで地域のつながりを深めようとしていることが見えるような夏祭りだった。

以上のことから、活動先では全く地域との関わりがないということではないが、まだ消極的な印象を持った。すぐ近くに小学校があるため、地域の子どもが集まりにくい場所ではない。今よりももっと地域の行事に踏み込んでいって、学童保育所に通う子どもたちを地域活動に触れさせる。それにより、子どもたちは様々なことを学ぶことができるだろうし、地域の人たちが子どもを知ることによって見守り活動のようなことも期待できる。そして夏祭りなども地域行事の一つとして行えば、子どもたちも地域に貢献した活動をすることができるのではないかと考えた。しかし、活動先のある地域は開発が中途半端に進んでおり、昔ながらの家が立ち並ぶ場所と新しい家が並ぶ場所が同じ地域の中で別れてしまっているような状態だ。近隣の住人との繋がりは希薄なものになっているだろうし、若者と高齢者の住む場所は別れてしまっているようにも見える。このような状態で地域活動を積極的に行うということは難しいことだと思った。そのため、地域が一丸となって活動していくことが困難であるということが現状の課題となる。以上のことが活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題である。

子どもとのかかわり方と地域の中にあるＮＰＯ

社会福祉学部　社会福祉学科　２年　　河池ほのか
活動先：特定非営利活動法人こどものいえ
ゼミ：山本和枝

はじめに

私は、今年サービスラーニングを行った。私が行ったＮＰＯ法人は、放課後児童クラブこどものいえだ。ここで、自分たちが計画した遊びを行ったり、こどものいえが行うイベントに参加したりと子どもと多くかかわった。

１，自分の成長と気づき

まず、サービスラーニングを通して私が成長したところや気づいたところを考える。成長したところは、子どもとの距離の取り方や子どもに対しての怒り方など子どもとのかかわり方だ。普段の生活で子どもとかかわることがないのでとても貴重な経験をしたと思う。他人の子どもなので、最初怒らないといけないときにどこまで言っていいのか考えた。自分の兄弟であればかなり強く言えるが、他人から子どもを預かっているのでなるべく優しく子どもたちにわかってもらえるように伝えようと初めのころはしていた。しかし、優しく言うだけでは子どもたちの態度は直してもらえなかった。そこで、自分でもこのままではだめだと思い、口調を強めた。しっかりと怒らないと、子どものためにならないとその場にいた職員の方に言われ、なるほどと納得した。遊ぶときは遊ぶ、怒るときは怒るとメリハリをつけることが大切だと感じた。

私が自分の中で特に成長したと感じるのは、言いたいことははっきりと伝えることだ。私は、積極的に話しかけることが苦手だった。こどものいえに初めて行ったときも子どもから話しかけてもらうのを待っていた部分があった。しかし、３、４日目くらいから私から子どもたちに話しかけにいき話したことのない子どもと話すことができた。また、こどものいえの責任者の人との話し合いでも自分から「こうゆうことをやりたいと考えている」と伝えることができるようになった。昔は、考えているだけで口に出して言うことはなかった。その理由として、自分が考えていることが間違っているのではないかと思ったり共感してもらえないと恐怖に感じたりしたからだ。しかし、子どもたちと出会い子どもたちは素直なのでストレートに自分の意見を言ってくるので、周りのことを恐れずに自分の意見を言うべきだと子どもたちをみて感じた。

気づきとしては、職員の方とのやり取りを多くしておけば良かったと思う。報告・連絡・相談はとても大事だと改めて気づいた。お互いに連絡をうまく取り合っていなかったためにこどものいえで企画されていた行事を私たちは知らなかったり、その日に行うと決めていた私たちの計画した遊びをこどものいえの職員さんは知らなかったりしたのでこまめに連絡を取ることが重要だ。ＬＩＮＥで連絡をするためのグループを作ったがほとんど活用していなかったと思う。だから、もっとグループＬＩＮＥを活用して連絡を取るべきだったと反省している。

自分の中で驚いた気づきがある。それは子どもが苦手ということだ。私は、今まで子どもが好きだから子どもを助ける仕事に就きたいと思っていた。しかし、実際に子どもとかかわり子どもとどのように接していいのかわからないことが多かった。今回は、子どもの

対象年齢が小学生だった。小学生の中で何が流行っているのかを聞いてもわからなかった。特に低学年の子どもたちがはまっていたアニメが私はまったくわからなかったので困った。子どもとかかわる中で、私が１番感じた感情は戸惑いだった。

２，活動を通して見えてきた地域の現状

活動してきた中で、こどものいえは地域とのつながりが希薄だと感じた。近くの公民館やこどものいえにいる小学生が通っている小学校を遊びの場で利用することはある。しかし、地域の人々とのかかわりがほぼない。地域の人々とかかわりがあれば、地域内で会ったとき挨拶はすると思う。だけど、私たち学生が企画したヌートリア探検をした際に、地域の人々と会っても挨拶していた子どもたちはほとんどいなかった。

施設に行って活動してきたことをもとに、その後の学習としてよりよい地域づくりを作るためにはどのようにすればいいか調べた。主に半田市の地域づくりについて調べた。こどものいえとは違うＮＰＯ法人２つにインタビューを行った。その時に感じたことは、地域の人々とカフェで直接的にかかわることと市内の行事に参加して間接的にかかわっていたことが分かった。市内の行事にＮＰＯ法人自ら参加することで地域の人々と交流することでいいきっかけになる。ＮＰＯ法人が市内の行事に参加することで、ＮＰＯ法人を利用している利用者やその家族と地域の人々をつなげる役割を担っていることがわかった。インタビューをした方は、ＮＰＯ法人と地域の人々が直接的にかかわることは難しい。だけど、自分たちから市内の行事などに参加して間接的にかかわっていくことは大切だと言っていた。

はんだまちづくりひろばの方にもインタビューをした。はんだまちづくりひろばの方に地域が抱えている問題を聞いた。半田市で抱えている問題は若者世代が少ないことだ。若者たちは、自分の意見を聞いてもらえないと思っているから意見を言わない。また、継続的に市民活動を若者たちは行えない。そこで半田市は、知多半田駅前地域円卓会議を２ヶ月に１回行うようになった。そこで生まれたのが、はんだＵ２２研究所だ。地域円卓会議を行うことで、高校生・大学生を中心とした若者の居場所づくりを目的としている。はんだＵ２２研究所では、若者の意見を取り入れＳＮＳで市内の情報を発信している。

半田市は、現在外国人が増えている。その外国人にとっても住みやすい環境にするための市民活動があることがわかった。困ったことを相談したり、交流会を開いたりする。地域の人自らが困っている外国人を助けたいという思いで行っていることは素晴らしいことだと感じた。

終わりに

１年間サービスラーニングを行い人として成長できたと感じる。私が知らなかった地域のことを深く掘り下げ抱えている問題知り、どのようにすればいい方向になるのかを考えるのはとても楽しかった。私自身、子どもに対して苦手意識があったことには驚いた。だけど、苦手意識を少しでも減らせたらいいなと思った。子どもに対して苦手意識を減らすことでやってみたいことが増えると感じた。

ＮＰＯ法人が地域に間接的にかかわっていることのほうが多かったと知って驚いた。でも、市内の行事にＮＰＯ法人が参加していることがわかったので若者も含めたたくさんの地域の人々が市内の行事に参加すれば地域がより盛り上がると思う。１つの地域が盛り上がるとその周りにあるほかの地域も盛り上がり地域の活性化につながるのではないかと考

える。１年間、楽しいことや大変だったこともあったがサービスラーニングを行ってよかったと思った。

サービスラーニングを終えて私が学んだこと

社会福祉学部社会福祉学科２年　　森下　瑞希
活動先：特定非営利法人菜の花　こどものいえ
ゼミ：山本　和枝ゼミ

①自分の成長と気づきについて

４月から新しいゼミに変わってすぐに、サービスラーニング先の決定があり、とても迷ったが、私は、特定非営利法人菜の花　こどものいえでサービスラーニングを行なわせて頂くことに決まった。こどものいえは、半田市乙川の向山地区にあり、近くには乙川東小学校がある。また、ＪＲ乙川駅から徒歩25分くらいのところにあり、新しい家が多く並んでいる地区にある。そこでこどものいえは主に乙川東小学校の子ども達と乙川小学校の子ども達の学童として活動をしている。５月６月は、実際に事前訪問をさせていただいたり、サービスラーニングの活動計画をより濃くしていくことができたりした。事前訪問では、午前中の訪問だったために実際に子ども達と会ったり、遊んだりすることは出来なかった。だがこの日は、指導員さんに子ども達が普段どのような環境で遊んでいるのかや、どのような過ごし方をしているのかについて教えて頂いた。また、サービスラーニングの時の学生だからこそできることを考えてほしいということ、学生が主体になってサービスラーニングを運営し、こどものいえ側が全面的に協力をしてくださること、子ども達に普段こどものいえでできないことを企画して体験させてあげてほしいということをお聞きした。７月は、テストもあり忙しい中ながら、計画を細かくしていき、役割分担も細かく決めていった。私達が活動をした期間は、８月の後半の６日間だった。この時期だと、夏休みも後半になり、遊びにも飽きてきてしまうのではないかという指導員さんの声があったので、企画を５日間考えた。１日目は最初プールに行く予定だったが、小学校のプールの都合上プールに行くことはできず、こどものいえで一日子ども達と過ごした。２日目はフィルターを使って水の実験、３日目は公民館でドッチビー、４日目はヌートリア探検、５日目はおやつをかけたビンゴ大会、最終日の６日目にはこどものいえの夏祭りに学生ブースでお店を出展した。どの企画にも、子ども達が普段体験できないことということを考えながら企画した。企画をやってみて、フィルターの実験では、子ども達の創意・工夫がとても見られ、子どもの発想力の豊かさが感じられた。ヌートリア探検では、ヌートリアを探しに、子ども達全員で施設の外に出た。暑い中歩くのは大変だったと思うが、達成感を味わってくれたのではないか。その他の企画もとても面白かった。

気づきや成長として、子ども達との関わり方が一番学べたと思う。６日間も続けて子どもに関わる経験は大学生では少ないので、こんなに密に関わらせていただけたことがとても嬉しかった。その中で、子ども達の距離が近くなればなるほど、注意などもしなくてはならない場面も生まれる。その時は、指導員さんがどのように子どもに対して接しているかを実際に見させて頂き、学ばせて頂いた。サービスラーニングを通して、連絡など基礎的な部分から、子ども達との関わりという発展した所まで学ばせて頂くことができ、とても大変だったが、大学生だからこそできるとても貴重な体験ができた。

②活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

サービスラーニングを通じて、地域や市民活動について考えた時に、私達が行った菜の花　こどものいえはあまり、地域との交流がなかったように思えた。そこで、自分達がもっと学んでみたいと思ったことをキーワード化して、グループを新しく組み、考えた。私は、子どもに興味があるが、その中で子どもが育っていく環境や、子育てできる環境を考えた時に“地域”が大切になるのではないかと考えている。グループでは、地域をキーワードにした、世代間交流や、障害、偏見、差別についてなど、地域を見たときに幅広い問題があがっていた。メンバーのそれぞれの学びが地域にあることから、テーマを『より良い地域づくりをしていくために』とした。その中で、実際に地域が抱えている問題について、知ろうと考え、グループのメンバーのサービスラーニング先である、特定非営利法人りんりん、特定非営利法人　教育ネット　はんだ、クラシティ半田にある『まちづくり広場』にインタビューをした。私は、都合が合わず実際にインタビューに行くことはできなかったため、メンバーのインタビュー結果を聞いたり、見たりして学びを深めることになった。

クラシティ半田『まちづくり広場』では、「市民」「半田市社会福祉協議会」「行政」が協働し企画・運営を行なっている。そして、総合的な窓口としてボランティアの紹介や、困りごとの相談、また話を聞いてほしいという市民の要望に応えている。さらに、半田市には、半田市が認定しているＮＰＯ団体や市民団体がたくさん存在している。そのためまちづくり広場ではこのたくさんあるＮＰＯを繋ぎ、コーディネートするために団体の繋ぎ役として交流会を開く役割を担っている。ここでは、高齢者の年代や、ＮＰＯの活動をしている方からは、若者世代が少なくて困っているという事、一方で若者世代からは、私達の意見がなかなか届かないという声が聞こえた。その対策として、知多半田駅前地域円卓会議が行なわれている。さらに、ＳＮＳや市報などで情報提供を図っている。

ＮＰＯ法人りんりんでは、ふわりんまつりや、ふれあいりんりんバスツアーなどを開催して地域との交流を図っている。また、ＮＰＯ法人　教育ネットはんだでは子ども茶屋や、とらいじょ部という活動があり、また、地域で開催される行事に参加をしていた。この２つのＮＰＯについて、地域とＮＰＯとの繋がりが深いことや、子どもの成長に力を入れていることが分かった。このことによって、ＮＰＯの活動が地域に介入することによって、地域活動が活発化し、繋がりが深くなることと子どもを成長させ、次世代へとつなげていくことが大切だと考えた。このことから、より良い地域づくりをしていくためには市民団体同士をより多くつなげ、交流の輪を広げることと、子どもにたくさんの経験をさせ、繋がりの大切さを学んでもらう事が大切であるという事が分かった。

１２月に行なわれた、サービスラーニングの姉妹ゼミ報告会と、全体会では、市民団体や、ＮＰＯ、ＮＰＯ法人についての違いについての理解の浅さが分かった。２年生の１年間、サービスラーニングを通して、生きた学びがたくさんできたのではないかと考える。また、報告会を経て学んだこともあり、これからぼ学びにつなげたいと思った。